

記憶と記録

櫻井 敬久
Sakurai Hirohisa
(山形大学)



まだ自宅にテレビがなかった小学校低学年の頃だと思うが、毎週土曜日に公民館で上映するニュース映画を兄について行って見ていた。白衣を着た検査員のような人がマグロにガーガーという音を出す器械を当てていて ^{90}Sr という大きな白い太字のテロップが入った映像を憶えている。この頃、友達と雨が降ってくると互いに「髪が抜けるぞ」と言って頭を手で覆って急いで家の中に駆け込む遊びをしていた。“放射能”より“ ^{90}Sr ”の方が記憶に鮮明である。当然、その正体や放射線など知らなかった。一方で小学生向けの「科学クラブ」などの雑誌に“原子力”がロケットなどとともに未来の夢としてワクワクするようなイラストで描かれていた。しかし、記憶の中で原子力と放射線は結び付いていない。ゴジラの映画は円谷英二監督と特撮のキーワードが記憶にあるが放射能の申し子であるということは知らなかった。これらは1954～55年頃の記憶のようだ。

それから約40年経って、古木年輪の放射性炭素を測って昔の宇宙線や太陽活動を調べる研究を始めた。大気圏核実験の年輪中の放射性炭素濃度の記録を見ておくべきといわれ、秋田県の秋田杉と山形県の金峰杉の年輪を測ったところ1963～64年頃がピークとなっていた。大気圏核実験の頻度は1954年頃から1963年まで急激に増加していて年輪データはそれに対応している。しかし、中学生時代には放射能に関連する記憶がない。

大学に入った頃、原子力潜水艦の寄港について素粒子と宇宙線の有名な先生の講演があった。“モニタリングポスト”という言葉は初めて聞いて何かすごい装置と思っていたら「海水の放射能は皆さんでも簡単に測れるよ」と言われ興味が湧いた。だが、具体的な方法については聞けなかった。大学1年の基礎物理実験の授業でローリッツェン検電器に嵌ったことがきっかけかどうかは定かでないが、その後比例計数管、シンチレーション検出器などの開発研究に携わってきた。しかし、恥ずかしながら福島第一原子力発電所事故のときまでモニタリングポストの中身を正確には知らなかった。

約15年前から、宇宙線生成核種 ^7Be と太陽11年周期活動との関係を調べる観測研究を始めた。大学の屋上に置いた大気サンプラーでガラスろ紙に収集した浮遊塵を低バックグラウンドGe検出器で γ 線核種分析をして、 ^7Be の空气中濃度変化を毎日記録している。最近の太陽活動はどれもノーマルでないようである。ようやく11年活動が見えてきた矢先に福島第一原発事故が起きてしまった。データに ^{131}I や ^{134}Cs 、 ^{137}Cs が急に現れてきた。テレビでは約60年前のニュース映画と同じような報道が流れた。望まない巡り合わせとなった。しかし、記憶に頼らず記録しておくことは大事なことなので、現在も継続して推移を測定している。

福島第一原発事故が起きてまもなく、GM計数管などにより、いろいろな場所で多くの測定が行われた。市民の皆さんの放射線に対する意識のバックグラウンドレベルが高くなっていること、そしてエロクトロニクスを含む情報技術の急激な発展が基にあったからだと思う。

それにしても、 ^{137}Cs が60年前の記憶になかったのはなぜだろうか。